

個性という名の名札

尼崎市立塚口中学校 一年 圓谷 大翔

僕は小学生のころ、少年野球に入ってたけど、野球のセンスはなく、いくら練習しても、みんなのようにうまくならなかった。

うまい子の保護者の中には、そんな僕に陰で「あいつはもう野球をやめた方がいい」とか「やる気がない」と言う人もいて、本気でやめようかと悩んだこともあった。だけど、僕は足だけは速かった。なんとかそれを生かしたかったけど、そもそも試合に出れない。悔しい気持ちと情けない気持ちとで素直に野球を楽しめなくなっていた。

やめるのは簡単だった。でも、やめるのは逃げるようで悔しかった。僕のことをばかにした大人たちを見返してやりたい気持ちもあった。そこから、必死で練習して、それでも試合にはほとんど出られなかったけど、卒団までやり切った。

チームで、野球のうまい子でも、走るのが苦手でもものすごく遅い子もいる。守備はうまいけど打つのが苦手な子もいる。野球のセンスはあるのに精神面が弱くて押されると試合中に泣きながらプレーする子もいる。

たぶん、陰で僕がばかにされてるのを一番つらく思ったのは母だと思う。だけど、母はそういう子たちのことを一度もばかにしたり悪く言ったりしたことはない。そして、いつも僕に練習で走り込むとき、遅い子がいたら声をかけてあげなさい、自分より走るのが遅いからと見下すようなことはするなと言われた。「あなたが野球がうまくできないように、その子は走るのが苦手なだけ、みんな得意なことと不得意なことがある。でも、それはそれぞれの個性。できるから良くて、できないから悪いわけじゃない。苦手なところは周りが補えばいいだけ」と教えられた。

僕は、野球に関しては毎日遊ぶ間を惜しんで練習してもみんなに追いつくことはできなかったし、結果を出せないの、それだけ陰で練習してることも分かってもらえなかったけど、自分ががんばってきたことはいつか自分の経験値として返ってくると信じている。

そして、僕は中学生になって、吹奏楽部に入った。走ることを生かせるスポーツを…と思っていたけど、たまたま友達に誘われて見学に行ったときに楽器を演奏することの楽しさにくぎ付けになった。ずっと運動をしてきた僕には未知の世界だったけど、今楽しくて仕方がない。ずっと野球は続けなければと思ってたけど、苦手なことに執着することはないし、新しいことに挑戦することで自分の個性を生かせる場を見つけることができるんだと思った。

きっと、周りにも僕のように苦手なことをばかにされてつらい思いをし、できないことを何とかしたいと陰でいろんな努力をしてる人がいると思う。表面上だけ見て人を判断することのないように、自分よりできない人を見下すことのないように、そして、自分が人よりできることがあってもえらそうにすることがないように、誰にも平等に同じ態度で接することができるような人に僕はなりたい。

そして、自分にもできないことがあるように、何かに行き詰って困ってる人がいたら、優しく声をかけ、手を差し伸べたい。僕もそうやってたくさんの人に助けられて今があるのだから。

個性はその人を表す名札のようなもの。みんな同じだときっとおもしろくない。いろんな人がいるからお互いに刺激になったり、助け合ったりで周りと一緒に過ごすことができるのだと思う。できないところ、悪いところに目をやるのではなく、その人のきらりと光るものを見つけられたら僕にとってもそれは大切な宝物になるように思う。

これから出会うたくさんの人のきらりと光る個性をたくさん見つけて、僕の人生の宝箱を満たしていきたい。